

[5] 白金高騰、その時どうする リースに、現物の調達

編集部

白金（プラチナ）相場が高値を続けています。指標となるニューヨークの白金先物相場は2006年5月17日に1トロイオンス1,347ドルの史上最高値をつけた後、下落しましたが、1,200ドル台での高値を続けています。つれて、日本の東京工業品取引所（東工取）の白金相場も5月29日の1グラム4,658円をピークに下がっていますが、4,000円台と歴史的な超高値圏にあります。

排気ガスの触媒需要が急増

高値を続けている最大の要因は需要に供給が追いつかないことにあります。白金は7年連続供給不足といわれてきましたが、2006年も供給不足のまま年を越しそうです。これは自動車の排気ガス浄化装置向けを中心に触媒需要が年々、増えている半面、供給が思うように増加しないためといわれています。この需要増をみてファンドなど投機筋が年前半に積極的に買っていましたが、その後、利益確定売りなどで下がったといわれています。それでも触媒用需要が底堅いだけに、今後、下がっても白金に代わる触媒が見つからない限り、大きな下げはないとの見方が多いようです。

白金といえば、宝飾用が多いと思う人もいるでしょうが、実は白金を宝飾に使うのは日本などごく限られた国で、多くは工業用に使

われています。特に触媒が多く、しかも、最近、環境意識の高まりで大きく伸びています。04年では工業用需要が全体の約60%を占め、そのうちの65%が自動車の触媒といわれています。半面、宝飾品用は33%にすぎません。つまり、白金は重要な工業原料となっているのです。それだけに、白金価格の変動からどう企業を守るか、供給不足の白金をどう手に入れて使うかは企業経営に重要なファクターになっているといえます。

利用しやすいスワップ、先物

その場合、利用しやすいのが、スワップや先物取引です。スワップは前に述べたように「変動価格と固定価格の交換」を意味しています。そこで、ユーザーは安心して、一定価格で白金を調達できます。もう一つ、先物取引はこれまでに述べたように、ユーザーは「将来、価格が上昇する」とみた時に先物市場で買っておけば、価格の高騰から企業を守ることができます。逆に「将来、価格が下落する」とみた時に先物市場で売っておけば、価格の下落から企業を守ることができます。先物市場で受け取ることも渡すこともできます。東工取での受け渡し枚数は2004年で2,691枚、05年で2,796枚。1枚は500グラムな

白金リースレートの推移



ので04年は1,345.5キログラム、05年は1,398キログラムと1トン以上に達しています。ちなみに、日本の白金の需要量は年間60トン前後の年が多いので、取引所を通じての受渡しはかなりの量といえます。鉱山会社や宝飾品の加工業者などがよく使っているものに「リース」があります。リースは鉱山会社の場合、銀行など白金の所有者から白金を借りて、自社で白金を生産、それで返そうという仕組みです。

また、白金の加工業者は白金を借りて、それで宝飾品を作り、その宝飾品を売って白金を貸し手に返すという仕組みです。当然、借り手は借りている期間、利子を払わなければなりません。これを「リースレート」と呼びます。リースレートは需給によって変動、価格の先行きをみる目安になっていますが、それ以上に企業経営者には資金がなくても、白金を調達できるというメリットがあり、貸し手には利を生まないはずの白金で利息を稼げるというメリットがあります。借り手、貸し手にとって極めて利便性が高い方法といえるでしょう。特に白金の価格が高騰、原料仕入れに多額の資金を必要とする時などに有用性のあ

る手段といえるでしょう。

キャリーレートにも

リースと似た方法にキャリーレートというものがあります。これはリース料を払って借りてきた白金を他の投資で使い、期間がきたら、白金を買い戻して、貸し手に返すというものです。金でよく行われていますが、白金でも可能です。この資金を投機的に使うと、失敗した場合に問題が起こる可能性もあるので要注意といえるでしょう。

また、2004年の商品取引所法改正で、石油同様、ユーザーも会員になれることになりました。この結果、宝飾加工業者、排気ガスの浄化装置メーカーなど、白金を使う企業も会員になれば、少ない手数料で売買でき、場合によっては東工取の運営にも携わることができるようになりました。また、ヘッジ取引の認定を受ければ建玉を増やすことができるのも、これもまた石油と同様です。白金はパラジウムと特性がよく似ており、価格の動きも比較的似ています。そこで、パラジウムなども白金と同様、スワップ、先物取引の利用が可能です。